

小説教材に対する解釈方略の検討

—大学生による「山月記」解釈の分析を通して—

山 元 隆 春

— 解釈方略をとらえるための理論的仮説

愁ひつつ岡にのぼれば花いばら

俳句の約束事を知っている人ならば、これが五・七・五の音数律を守り、そのテキストの中に△花いばら▽（野ばらの花）という初夏の季語を含み込んだ俳句のひとつであることに気が付くことであろう。さらに俳句に通じた人であれば、このテキストが△与謝蕪村▽という江戸時代の俳人の手によるものだとということもわかるだろう。また、私たちは、物思いに沈みながらひとり歩いてきた人が、小高い岡に登って野ばらをみつめている情景を思い浮かべてみることもできる。

このテキストを何ごとかを伝えるために作られた文だと考えようとすれば、当然そこにはその目的を全うするための条件が欠けている。このテキストを読んだ者は、そこに主語や述語などの文

の成分が欠けており、発話主体の行為を表わす△愁ひつつ岡にのぼれば▽という表現と△花いばら▽という名詞とのあいだが断たれているからこそ、それらを結び付けてこのテキストを解釈しようとする。そしてこのテキストが生活上の何らかの目的遂行のために用いられたものではない、ということを感じるからこそ、かえってそこにこのテキストの暗示する場面を思い描こうとする。

日常の会話においては、いかなる省略が為されようとも、また、いかに一つの発話ともう一つの発話とのあいだの連続が断たれていようと、それを補うに足りるだけの△場面▽がある。しかしこのテキストは、日常的な会話文であれば当然あってしかるべきはずの△場面▽の欠如を前提として成り立っている。私たちがこのテキストを読んで解釈しようとするのは、そういったことを暗黙の裡に前提としてしまっているからにはほかならない。そうでなければ、このテキストは文法的規則から逸脱した文だということになってしまう。

日常の会話文であれば、当然あって然るべき△場面▽が欠如しているゆえに、また、そのテキストにつながる他のテキストが与えられていないがために、かえって私たちは自分でに獲得している言語経験を背景としながら、このテキストをどうにかして解釈しようとする。△愁ひつつ△にのぼった発話主体の行為は何を意味するのか？その発話主体の行為と△花いばら▽とはどのようにかわってくるのか？テキストが仕掛けてくるそのような△謎▽に、テキストに明示されている△手がかり▽を結びつけながら挑んでいく営みが解釈という行為である。このテキストにおいて読者の解釈行為を誘う△力▽は文の成分の省略や文脈の断片化によってひきおこされる。程度の差こそあれ、読者の解釈はどのようなかたちでの読者とテキストとのせめぎあいの過程を通して産み出されるのである。

△私たちは、ある文学作品の印刷されたテキストを「作品そのもの」とみなさないうように用心しなければならぬ。私たちが「テキスト」から「作品」を復元する過程に深く思いを致す時、多くの問題が頭をもたげてくる。^注

クライゼナー（Cluysenaar, Anne）がこう述べているように、読者の解釈行為によってもたらされるものは、テキストという言語記号の組織体とは別物である。私たちとは関係なく存在していた△愁ひつつ△にのぼれば花いばら▽という一四文字の記号群は、私たちの読み、解釈するという行為がなければ、まさしくインクの染みにすぎない。テキストとは、言うなれば読者の解釈行為によって作り上げられる△文学作品▽という氷山の一角にすぎ

ないのである。△文学作品▽の印刷された形態でしかないものそれがここのいうテキストである。

解釈という営みは、言うなれば個々の読者たちがそのテキストと関わることで産み出される、その読者なりの世界像（△文学作品）を産出することである。彼（彼女）は、作者によってテキストに仕掛けられた方略に惑わされたり、同調させられたりしながら、自分なりの世界像を作り上げていくのである。芸術家が作品を産み出していくように、読者もまたテキストの言表を自らがすでに保有しているものと関わらせて自分なりの作品を産み出していく。その絶え間ない営みが解釈の生産であり、そのために用いられる方略の如何によって各々の読者の解釈の一致および差異は生まれるといつてよい。

何を根拠として、どのようにその解釈が産み出されてきたか—すなわち各々の読者がどのような解釈方略を用いているかを見極めることは、文学の教授△学習を考えていく上で避けて通れない課題である。本稿では、大学三年生が中島敦の「山月記」というテキストを読んだ結果として生産した解釈事例の分析を通して、この課題を掘り下げてみたい。

二 「山月記」に対する解釈方略の検討

ここに取り上げる「山月記」の解釈群は、一九八八年一〇月二七日（木）に、鳴門教育大学学校教育学部「国語科教育法」（小森茂助教授担当△当時）を受講する学部三年次生三七名に記

してもらったものである。学生たちには、次の三つの質問を出した。

- (1) あなたは、高校時代に「山月記」を学習した経験がありますか。
- (2) 高校時代に、「山月記」について、どのような学習をした経験がありますか。授業について記憶していることがらや、先生に教わった解釈、あるいは自分が抱いていた解釈など、書いてみてください。
- (3) 今日、「山月記」の本文を読んで、考えたこと、思ったことや感じたことを書いてください。その際には、プリントに添えた「人虎伝」も参照してみてください（もちろん、「人虎伝」に触れるかどうかはあなたの自由です）。

（この調査に用いた「山月記」の本文は「精選国語Ⅱ新修版」
▲明治書院V所収のものである。また、「人虎伝」の本文は、「鑑賞日本現代文学 中島敦・梶井基次郎」▲角川書店V所収のものを用いた。）

因みに、(1)に対しては三七名中三四名が「ある」と答えた。学生たちの大半が高校時代に「山月記」を学習した経験があるということとは、ここでの解釈事例を検討する場合に留意しておかなければならないことである。本稿では、右に掲げた質問事項の(3)を中心に、学生たちの用いた解釈方略を分析してみたい。その際

に、質問事項②への回答も適宜参照する。

アメリカの国語教育学者アラン・パーヴィス (Purves, Alan) は読者にテキストの主題を導き出させる手がかり(発見法)として次の七つを指摘している。⁵⁴⁾

- ① 中心人物の像の全体をテキストの叙述から描き出すこと。
- ② 題名を手がかりとすること。
- ③ 並置されているものや、明示されたりあるいは伏在している対比を探っていくこと。
- ④ 語や出来事の反復を探し出していくこと。
- ⑤ 物語のモチーフに注目すること。
- ⑥ 物語の構造に注目して、構造の果たしている役割を探っていくこと。
- ⑦ 特定の登場人物について掘り下げていくこと。

例えば、「山月記」という題名の中の△山Vと△月Vとがいったい何を象徴しているのか、と考えることも手がかりの一つである。それは、テキストの中に引用された漢詩の意味と李徴・袁綏という二人の人物の対比を考えていくことにつながっていくだろう。また、変身というモチーフを問題にするところからは、カフカの「変身」その他の、変身をモチーフとするテキストとの比較考察の可能性が生じる。さらに、物語構造に目をやると原典の「人虎伝」との比較によって、作者の中島敦が「山月記」の物語構造に託した意味の考察が導かれるだろう。あるいは、李徴という人物、袁綏という人物について掘り下げていくところから、テキスト全体の主題を読み取っていくことが可能になる。

こういった営みによって、読者のテキスト解釈行為が促される。言うなれば、このような発見法そのものが、テキストの解釈方略となるのである。しかし、パウヴィスの七項目の発見法が、全てを言い尽くしているとは思えない。彼の発見法においては、読者（解釈者）側の「自己」の問題が括弧に括られている嫌いがある。解釈の方略を考えていく上で、これらの発見法は充分不曖に富むものであるが、「山月記」のようなテキストの場合、むしろそういった発見法の運用が解釈者の自己と分かち難く結びついていることに注意を払う必要がある。本稿では、この解釈者の自己がテキスト解釈にどのように反映されているかということ、解釈方略検討の核として考察を進めていきたい。以下で取り上げるのは、「自己を投影する」「人物を評価する」「先行経験を用いる」「一般化を行う」「テキストのことは非日常化の手段として用いる」「原典と比較する」の六つの方略である。

二・一 方略1：「自己を投影する」

解釈という行為が、目前に展開するテキストの内容を自らの裡に取り込み、そこから自分にとって物語を生成していくこととする営みであるなら、各々の解釈が当の解釈者の「自己」に言及することは、きわめて自然なことであると言える。解釈行為において、 \wedge 統合力としての \vee 「自己」が、どのような形で作用しているかを見極めていかなければならない。精神分析的批評の立場から読者反応の探究を図るノーマン・ホランド（Norman Holland）

のことは借りれば、解釈とは \wedge アイデンティティの機能の一つ \vee であり解釈者の「自己」同一の主題 \vee の変奏に他ならないからである。⁷⁴

学生たちの解釈事例の中に、各々の解釈者の「自己」 \vee はどのように表現されているのだろうか。

A
李徴はほとんど羞恥心に近いものを抱いたため、人と接することを避けた、と言っています。私にもそんな時期が多々ありました。そのうち、一回は丁度この「山月記」を読んだ時と重なっていました。読んでいて、何か私と通じるところがあったので、少しこわくもありました。その後も何回か人と接することがいやになった時もありますが、決して心の余裕だけは失わないようにしましょう、失えば虎になってしまふ、と自分に言い聞かせていました。（傍線＝山元）

この事例は、「山月記」の中心人物 \wedge 李徴 \vee の心情に自己の経験を重ねた解釈を示している。初めの三文からわかるように、この解釈は初読において示されたものではない。少なくとも、 \wedge 読んでいて、何か私と通じるところがあったので、少しこわくもありました \vee と感じた昔のAは、ここで自らの解釈を記しているAと同一ではない。

李徴 \uparrow 自己 \uparrow 自己 \downarrow

簡単に記せば、この事例に表わされている解釈者と人物 \wedge 李

徴Vとの関係は右の通りになろう。この時、「山月記」というテクストはAにとって李徴の運命そのものであり、A自己Vの内側に残った残響としての物語像であった。目の前に展開されるテクストの文字の連なりを読み取りながら、Aは彼女自身が内面に作り上げていた「山月記」という作品を読んでもいたのである。A私にもそんな時期が多くありました。Vという一文は、Aが李徴の運命とAの自己史上の問題とを結び付けていることを示している。A読んでいて何か私と通じるところがあったのでVという件りは、「山月記」というテクストに内在する、読者の解釈を誘う力の源を物語るものである。

このように解釈にA自己Vを反映させる傾向は、「山月記」を初めて読んだという解釈事例にも見受けられた。

B
私は李徴がなぜ虎になったか、思いあたることを過去の自分を考えながら友人に話した言葉が、一つ一つ心に深くひびいてきた。私にも李徴が後悔していることが、あてはまるころがあると思った。私は、自分がへんに自信をもっていることはそれが認められないとひどくおちこんでしまう。(中略)これは臆病な自尊心だと思う。しかし、そういう自尊心が傷つくのをおそれて人と遠ざかってしまうのは、おろかなことだとわかった。(傍線II山元)

傍線部にもあるように、A李徴Vという人物に自らを重ね、自己に言及しているという点が興味深い。この解釈者は、自分自身

が現在為止終えた読みの経験をここに報告したわけである。そういう意味で、最初に取り上げた解釈者の姿勢とは区別できる。解釈をしている現在の自分の実感に重きを置き、けっして過去回想の形で物語っていない。だからこそ、傍線部に見られるように、Bが登場人物の問題を自己の問題に引きつけて解釈しているという事実は、初読のレベルにおいてさえ「山月記」が個々の読者のA自己Vに強く訴えかけてくるのだということを明らかにしている。

もちろん、「山月記」に対する初めての解釈の例には、自己の問題に触れる以前に、登場人物に対する姿勢を示した次のようなものもあった。

C
恥ずかしいことであるが、私は、今日初めて「山月記」を読んだ。教科書に採用されているようであるが、大学生にある私にとっても、少し難しいもののように感じた。初めに、李徴に対して同情に近い形で、悲しいような彼がかわいそうな感じを抱いた。

この解釈者は、まず、李徴にA同情に近い形VでのAかわいそうな感じを抱いている。初読にもかかわらず、Cは李徴の数奇な運命を憐れむ姿勢を示しているのである。しかし、人物を憐れむ姿勢そのものは、人物を評価する姿勢とは異なっている。C自身これに続く部分で、自分の李徴に対するA同情に近い形Vでの共感の源に自らと李徴との同一視があったことを、図らずも告白

している。

C' けれども、今の悲しいのは、李徴に対する同情に限りなく近い悲しいではなく、自分も、一人の力ない人間として人間が彼の奥にもだえているような人間、そして私自身の人間が悲しいのである。この作品は「人虎伝」を題材として書かれたものようである。虎ではなくてあくまで「人間」の、しかも無力な人間のはかない抵抗を描いた作品であるように思った。

彼女の解釈には、李徴の奥のもだえている人間「一人の力ない人間」私自身の人間、という図式が読み取れ、そこには、そのように力のない人間Vが力はない抵抗Vをする物語として、「山月記」をとらえようとする姿勢を見ることが出来る。この場合、「山月記」を解釈することは、彼女にとってみれば、李徴の中に自己を投影し、自分自身を解釈することになっている。言うなば、この時「山月記」は彼女にとって自己を映す鏡のごときものとなっているのである。すなわち、李徴への同情が、実は自己の弱さを論う心の裏返しとなっていたわけである。

これらの解釈事例は、それぞれN李徴Vのことを語っているように、これらで実は解釈者自身の自己Vを語っていると言っている。もしも、この種の解釈のみが認められれば、テキストの位置は至極曖昧なものになってしまいかねない。解釈の中で自己Vの占める割合が限りなく大きくなってしまったためである。しかし、こ

のような解釈群はまた、「山月記」の言表とのせめぎあいを通して、「山月記」の世界に自らの内部の世界を投影しようとした結果と考えることができる。同時にこのような解釈群は、自己Vを問題にしないで解釈を成立させることが果してその人の解釈のためによいことなのか、という問いをも提起してくれる。「山月記」が解釈者たちの裡で文学作品Vとして成立しているのはこういった解釈者個々がテキストに自己を投影させるという方略をいづれかの段階でとっているからに他ならない。この種の方略をとった解釈を主観的なものであるという理由で打ち捨ててしまつて、果して「山月記」を読んだと言えるかどうかは疑問である。

二・二 方略2：「人物を評価する」

解釈が登場人物に対して評価を行う場合にも、解釈者の自己Vは顔を覗かせている。「山月記」の場合、解釈者の評価の対象となる人物は、主としてN李徴Vである。

D 自分を恃み人と交わつたり師についたりすることもなく、そして賤吏に甘んじるを潔しとせず人交を絶ち詩作にふけた、実はそれは臆病な羞恥心のせいだという。何だかものすごく分かる共感できる。だれでも皆、そういう弱さのようなものを内に持っていると思う。

この解釈者は、言うまでもなく△李徴Vの心性の内に、人間一般に通じる心性を見出し、それを△そういう弱さのようなものVと名づけている。さらに△だれでも皆Vと述べることによって、△自己Vひとりとの共感に止まらず、共感する者としての共同性を志した解釈例であると言つてよい。

これに対して、△李徴Vを徹底して否定的に評価する解釈もあつた。

E
虎になつてからも、自己の詩に執着して、それらを後代に伝えなければ死んでも死にきれないと思つている姿をみると、どうしてそこまで、と思いたくなる。

F
李徴が長々と自分のことを話すが、私には、ただの弱さをおかしく言い訳にしか聞こえない。(中略||山元) 弱いのに、格好をつけたがるどうしようもなく情けない一人の男がそこにいる。しかも自分は虎になつたと信じている男が。虎なんて最高の虚勢だ。

G
わかつてほしいといひながら結局、自分の砦に閉じこもろうとしてゐる。自分の心をわかる人は誰もいないとかたく信じ込んでゐる様子がしばしばみえる。(中略||山元) 虎になつ

た彼を哀れと思うが同情はしない。

E・F・Gの解釈事例には、きわめて強烈な△李徴Vへの批判が込められている。これらの解釈者たちは、△李徴Vという人物を文字通り一人の男性として評価(品定め?)しようとしている。△李徴Vの自己へのこだわりを否定しようとしているところがこの種の解釈の大きな特徴である。

△李徴Vの△自己Vへのこだわりを、むしろ彼の強さの裏返しと解釈事例も存在した。

H
私は、虎になつてなお自己を捨てずに詩を後世に残したいと考えている彼は、本当は強い人間なのだと思うずにはいられない。

このような解釈として、登場人物を一人の人格として認め、その上で人物に対する評価を加えようとしている点では、さきに掲げた△李徴Vに批判的な解釈群と変わらない。△李徴Vを肯定的に評価するにしても、批判するにしても、解釈者は対象を客体視する者の姿勢をとらざるをえない。△自己Vの問題は一応棚上げした上で、△李徴Vの言動を認めていこうとしているわけである。

ここに「方略1」と「方略2」との違いを認めることができる。△自己Vをみつめ、△自己Vの問題をテキストに投影するのではなく、△自己Vを視野の外に置いて、李徴という人物を徹底的に対象化するとここにこの方略の大きな特徴がある。「方略

1」が「山月記」解釈において重要なものであるということには先に述べた。「方略1」をとる者も、「方略2」のような手続きを経ることによって自らの考えている問題を対象化することが可能になるのではなからうか。翻って言うくと、「方略2」を採る者も、人物への評価を下す理由を掘り下げていくことで、自己の問題を照らし出すことが可能になるであろう。そういう意味で、この二つの方略は密接に関わり合っているとと言える。

二・三 方略3：「先行経験を引用する」

前田愛はハイテクスターテクスチュアリティ intertextuality の概念を、ハすべてのテキストは先行するテキスト、プレテキストからの引用であり、そしてその引用されたもののモザイクであり、またその変形である²と、ごくわかりやすくまとめている。

I 高校時代に学習して以来読んだのは久しぶりであるが、本文が短いと読み易いのに驚いた。前は難しい言葉を追うのが精一杯で頭に入っていなかったので、今初めて全体を把握した感じだ。

J 作品全体に対しては、高校の時よりも、哀しさをたいなもの
を特に最後の部分で強く感じた。

この二つの解釈事例は、「山月記」に対する高校時代の自分の印象をプレテキストとして、それとの関係において、現在の自分の「山月記」に対する印象を述べたものである。共に、以前の印象の中心にあったものをずらして解釈している。この時、これらの解釈者たちにとって、以前の「山月記」の印象は、現在このテキストを読み進めている自己にとって他者性を有するものとなっている。この調査に参加してくれた学生たちのほとんどが「山月記」を再読したわけだが、彼(彼女)らが再読するという行為の只中で、程度の差こそあれ、自らの以前の「山月記」を読むという経験を、他者性を持つものとして対象化しつつ読み進めたのだということ、この二つの解釈事例は証してくれる。

高校時代に教師が示した解釈そのものが、他者性をもって現れた解釈事例も存在した。

K 「李徴は、あさましく弱い人間だ。」今まで自分はそう信じて疑いをもたなかった。けれども、道徳的な人間性を第一と考える立場に立った感想であると思う。李徴にしてみれば、俗世、俗物との交わりを絶ってまで自己の欲望(詩家として名を残すこと)を達成しようとするのが天命であると考えたであろうに…。

この解釈者は、質問事項(2)への回答の中で、高校時代に教師から李徴は己の内なる自尊心にのみ込まれてしまった弱い人間である³と教えられたと述べていた。ここには、この解釈者の

高校時代の教師の解釈をブレテキストとしながらも、それと全く正反対の解釈が示されている。この解釈者はさらに次のように続けている。

K'
虎になったのは、確かに李徴の尊大な羞恥心のためであり、彼の詩が一流のものになるのは、何か欠如しているのも、それに関係しているかもしれない。けれども、私は、虎になってなお自己を捨てず詩を後世に残したいと考える彼は、本当は強い人間なのだと思います。そしてそのあまりに強い人間であるがゆえに、自分の行き方を変えられず、人間であることを、彼自身が捨てたのではないだろうか。

高校時代の教師の解釈の是非はともかく、それが起爆剤となつてこのような解釈事例を引き出したことは確かである。高校時代の教師が、李徴に対して否定的な解釈を行なったことよつて、この解釈者のここでの解釈が引きだされたわけである。このことは、授業における教師の解釈の役割を考えさせる。すなわち、学習者にとって指導者の解釈そのものが、自らの解釈のためブレテキストとしていわば解釈の呼び水のごときものになりうるということである。

それが自己の過去の解釈経験であるにしろ、教師その他の他者による解釈であるにしろ、その解釈者の解釈の営みの裡で、他者性を持ったものとして意識される場合、多くは新しい解釈を導く

ブレテキストとして機能する。これらの解釈事例は、自己・他者いずれかの先行する解釈経験を、新たな解釈を導く方略として用いているのである。このような観点から言うと、たとえば授業論で言うハゆさぶりVは、ブレテキストとしての教師の解釈を学習者の解釈のハ呼び水Vとし、学習者による（主に口頭での）解釈テキストの産出を試みる方略である、と位置づけることができるだろう。

二・四 方略4：一般化を行う

D
自分を待み友人と交わったり師についたりすることもなく、そして賤吏に甘んじるを潔しとせず、人交を断ち詩作にふつけた。実はそれは臆病な羞恥心のせいだと思う。何だかものすこく分かる共感できる。だれでも皆、そういう弱さのようなものを持っていると思う。

〔方略2〕をも含み持つ解釈事例Dのハだれでも皆、そういう弱さのようなものを持っていると思う。Vという件りには、この解釈者が李徴個人の心理の問題を、人間一般の心理の問題へと一般化（普遍化）していこうとする方略を見てとることができよう。Dのハ何だかものすこく分かる、共感できる。Vということには、李徴に共鳴する読者心理の一端が伺えると言つてよい。

しかし、「方略1」に関して見てきたように、李徴に対して多くの学生たちが共鳴していたのも、少なくとも△臆病な自尊心▽△尊大な羞恥心▽という、きわめて不安定な修飾・被修飾関係によって表現された李徴のアンビバレントな心の姿に自らの心を重ねたからである。解釈者が自らの△弱さのようなもの▽に自覚的であればあるほど、「山月記」の李徴はその解釈者にとって親しいものと思われてくるだろうし、逆にそういった△弱さ▽を自らの心とはよそにあるものとしてとらえた△解釈者の場合、李徴に対して冷淡になるのは無理のないことだろう。

L
人間はだれでも自分の心の中に何人かの「自分」というものを持っていて普段は比較的よい人格の自分が、表面に出ていと思う。しかし自分が窮地に追いこまれたときに、もう一人の自分というものが現れる可能性がある。そういう普段は現れない心が明らかに虎という姿となって現れたものが「山月記」であると思う。そうすると誰でもが李徴になる可能性を持っているといえるのではないだろうか。

この解釈者もまた、李徴の心理の中に、読者一般に通じる心理を探り当てている。△普段は現れない心▽△虎▽という解釈は、心を意識／無意識の二層に分け、その無意識の層に李徴の変身の源を探っている。李徴の心の中で、意識の底部にあった部分がある。彼の意識の底部にあった部分とは、彼自身が日常抑圧していた部分であり彼が彼である根源的な存在理由となりながら、

彼自身近づきえないでいる部分である。そういう部分が表面に出て来ぬよう、人格の奥深い場所に沈めてしまおうとすることによって、かえって人格そのものに破綻を来してしまいかねぬ危うさが生じてくる。

李徴の裡のそういった危うさを問題にする時、解釈者がそれを△自己▽になぞらえようとすることは、おそらく抵抗の大きいことであろう。そのため、基本的には李徴を△自己▽になぞらえようとする行き方をとりながらも、それを読者一般・人間一般の問題へと広げて解釈しようとする方略がとられることになる。このような一般化を行う方略によって、テクストの主題への接近が可能になるのである。

二・五 方略5：「テクストのことは非日常化の手段として用いる」

M
次の解釈者は、小説のことはもたらず印象を解釈のばねにしている。

とにかく文章表現が難しい。私たちが日常使わないような難しい言葉もたくさん出てくる。高校時代、この教材を学習した時に、これらの難しい言葉の意味も全て把握したつもりでいたのに、どういう意味かわからない。思い出せない言葉がいくつもあった。たしかに、教科書で取り扱われている教材の中では、この「山月記」は長文の部類に入るくらいのもの

であったことを記している。おそらく初めて目にする人にとって、この作品は何かとまどいの多い文体、内容の作品ではないかと思われる。

文章表現の難しさは、このテキストにみられる漢語表現の意味を問う時、おそらく読者たちの多くに感じられるものである。

「山月記」に初めて出会う読者は、その冒頭の漢文調の言い回しに戸惑いを覚えることだろう。しかし、このテキストが、冒頭の難解さを抜きにすれば、至ってとらえやすい構造を有していることもまた確かである。事実、この解釈者は八中国調の難しい、あまりなじみのない文体、表現、そして、人間が虎になってしまうという現実では考えられないような奇異な内容は私にとってはかなり印象深かったと述べてもいる。ここからもわかるように、この解説者にとって、冒頭の難解さは、けっしてマイナスの要素となっていない。むしろ彼女の心の中に「山月記」という物語を強く印象づける手助けになったと言っている。

この解釈者が、八中国調の難しい、あまりなじみのない文体、表現Vと八人間が虎になってしまおうという現実では考えられないような奇異な内容Vとの二点を印象深かった点として挙げていることは興味深い。これは、この二つがともに、少なくともこの解釈者にとっては非日常的な事柄だったためである。つまり、非日常的な要素が、文体と内容の両面にわたって、テキストに対する彼女の印象を強めたと言える。そして、たとえ文章表現に難解さが備わっていたとしても、話の内容そのものはそのためにかえっ

て読む者の心に残るという事実をもこの解釈事例は語ってくれる。

この点で、「山月記」というテキストのことは有する難解さは、読者にそれまで体験したことのないような新しい読みの体験を誘う。難解であるからこそ、それは読者に未知の世界を開くための信号となりえているのである。ことばの難解さへの言及は、それゆえ、自らの難解さへの戸惑いそのものを表に出しながら、自分なりの「山月記」への印象を深めていこうとするための方略となりうる。難しいと言って投げ出してしまうはそれまでだが、その難しさに素直になることから、自らの読みの体験のとらえ返しが始まるのだと言っている。

二・六 方略6：「原典と比較する」

多くの場合、学生たちは八自己Vに言及しながら「山月記」について物語るといふ解釈方略を用いた。「山月記」のような複雑なテキストにおいては、自己に言及しない解釈方略を用いる方がむしろ稀であると言っている。ここで、八自己Vに言及しない解釈方略を用いた事例とは、たとえば次のようなものである。

N

「人虎伝」と「山月記」を改めて、読み直してみても、まず、中島敦のこの小説における手法を考えた。典拠では、虎の残酷性を語る描写が「山月記」に比べて少々具体的だ。(中略) 一方「山月記」の方では、虎の残酷性の記述が少なく、

李徴自身の後悔の言葉、心の中の葛藤ぶりが、事細かに描写されていて、「詩を書きとめてもらう」「妻子のことを頼む」という彼の弱さが真実味を帯びたものとして伝わってくる。／つまり、前者では、虎になってしまった。どうしようもない。という結果論がゆるぎもない事実として読み手に伝わってくるのに対し、後者では、その虎のあまりの人間くささから、読み手は、そういう印象をうけず、ふと李徴の心の中を思いやってみたくなる気持ちにかられ、この小説の続きを連想したくなるような気持ちになると思う。「人間くささを意識したこと」「山月記」においての彼の手法では、これについて考えさせられた。(中略)山元、／は改行を表す)

この解釈者は、「山月記」を、その典拠とされている「人虎伝」(調査時に、「山月記」と併せて提示した)と比較することによって、「山月記」の特徴を浮き彫りにして行こうとした。ここに、解釈者の「自己」は明瞭な形では全く示されていない。そこにあるのは、二つのテキストの表現構造を比較して「こうとする、分析ないし判断である。ここでの解釈者のまなざしは、対象としての「山月記」や「人虎伝」のことは注がれている。

原典とテキスト本文との関係を考える場合、私たちは比較という方略を用いる。比較を行う時、私たちの関心は、大抵作者の仕掛けや技法そのものに向かう。ただ、「人虎伝」と「山月記」とを比較しながら、この解釈者は中島敦が「人虎伝」というブレテ

クストを引用したり、変形したりする中で、新しく付与したものととして、わずかに「人間くささ」を挙げている。徹底的な分析に向かおうとするこの解釈者の解釈の水面下にある「自己」が、わずかに顔を覗かせた部分である。

「人虎伝」と「山月記」とを比較する方略を採った解釈事例は他にもある。

この話は、作者が「人虎伝」を参考にして、自己の意識の変革をテーマにした話であるように思う。

「人虎伝」の終わり方よりも、「山月記」の一匹の虎が白光をうしなつた月を仰いで、二声三声咆哮した後、姿をけしってしまったという終わり方が、より印象的であり、李徴の悲哀を強く訴え余韻を残していると思う。

「人虎伝」では馬はことわったけど羊肉は、「君去るとき即ち之を留めよ」といっている。「山月記」の哀愴は食物(エサ)の配慮をしていないことから「食べる」という動物にとって恐らく一番大切なことよりも、人間としての李徴の苦しみや悲しみを描きださったのではないかと思う。

「山月記」の方が、自分はまだ一家の大黒柱として何もしてやることができなくなった李徴にとって自然であるような気がする。

これらの解釈は、程度の差こそあれ、「人虎伝」というプレテクストよりも、「山月記」というテクストの方を好意的にとらえている。そして、その裏には、人間的苦惱Vというコードに文学性を認めようとする解釈者たちの傾向があるように思われる。「山月記」の研究史においてもこの点は非常に重要な争点となっている。おそらく人間的苦惱Vというコードをよそにしておいて「山月記」を読むことはできないだろう。

いずれにしても、二つのテクストを比較することによって解釈者の裡に生じた第三項（先に掲げた解釈事例Nで言えば人間的苦惱V）が、その解釈者にとってのテクストの間接的意味だということになる。いわば、隠された第三項としてのテクストの間接的意味（潜在的意味）を探るための手がかりとして、比較という方略は有効な手段となるのであって、この方略の習得そのものが、解釈のために学習者が学ばなければならない全てだということには、けつてならない。そのような手段をとることで解釈者の裡にどのような変容がもたらされたかということが問われなければならない。

大学生による「山月記」の解釈事例に示された解釈方略には、

程度の差こそあれ、彼（彼女）らが学校教育の中で教えられてきた事柄が影を落としている。「山月記」に関して教えられた事柄の中には、このテクストに対する過去の解釈が反映しているのであり、そういう意味で解釈方略のヴァリエーションは、過去における解釈の約束事（コンヴェンション）のヴァリエーションの反映だと言える。それでは、解釈方略とは、過去の「山月記」解釈史における解釈の約束事にとらわれた営みだろうか。

文学教育の目的は、文学の読み及び解釈の歴史が形造ってきた制度の側に学習者を同化させていくことばかりではない。文学教育は学習者の側の人独創性Vを保証する側面を保っていかなければならない。与えられた解釈を押し戴くばかりでなく、自分なりの解釈方略を用いながら独創性のある解釈を作っていくことを学ばせていかなければ、文学教育そのものが瘦せたものになっていきかねない。次節ではこのような問題を踏まえて、読者たちが解釈方略を用いて独創的な解釈を成立させていくための諸条件を探ってみたい。

三 解釈方略分析からみた解釈成立の条件

三・一 人なぞらえVの原理 — 解釈成立の母胎 —

世界を解釈しようとするとき、私たちは世界の側に自己と似通った構造を見いだそうとする。譬喩とは、そのような私たちの解釈傾向が形をとって現れたものとみなしてよいだろう。一つのテ

クストを解釈しようとする場合でも、まず私たちがとる解釈のための方略は、テキストに描かれたものを自己になぞらえるということである。

解釈とはまず、二・一の「方略1」で分析を行ったように、目の前のテキストに何らかの形で自己を投影する営みであると言えるのではなからうか。それがテキストの語法や構造にどの程度支配されているかによって、解釈に多様性が生まれるのである。あるいは、読者がそのテキストの行間にどのような黙示的な主題を見出しているかということによっても解釈は分かれる。李徴に自己との似通いを見出している解釈は、そのほとんどが、「山月記」を李徴という哀れな人物の心のドラマとみなす心理主義的な解釈方略を用いていると言える。

主題を問おうとする時、私たちの「山月記」解釈はそのように心理主義的なものとなってしまふ。心理主義的傾向を免れている解釈事例は、主として「山月記」というテキストの表現や構造を問題としていた(二・五「方略5」および二・六「方略6」参照)。そういった解釈群は、解釈者自らの内面の問題を「山月記」に投影しようとする方略ではなく、むしろ解釈者にとっては自らの外側の問題である。解釈対象としてのテキストの言表を問題にしたと言える。そのような解釈事例は、テキストの表現面の分析という方略をとっている。また、テキストに対して自己を投影する方略をとった者の中にも、「山月記」を自己を映す鏡の如きものととらえる者と、自らの価値観を表に出して評価的な発言をする者があったことに注意を向けたい(二・二「方略2」参

照)。

解釈者たちにとって、自己を問題にするかぎり、おそらく意見の一致をみることは不可能に近い。自己を投影しようとしたような解釈は、ノーマン・ホランド流に言えば、自らの \wedge 自己同一の主題 \vee を明らかにすることに向かうものである。自己を引き合いに出す類の解釈は、文学における \wedge 典型 \vee を探る営みとは、相い反すると言ってよい。個々人の自我は一つ一つ異なるわけであり、全てを一つに統べることなどは到底不可能なことだからである。

解釈の授業は、そういった個々別々の自己同一の主題の中に、何らかの共有しうる部分を探り当てるために行われなければならない。テキストのことはという共通分母を基にして、お互いの自己同一の主題や価値観を表に出させて、その内の共有しうる部分を教室において確認していくという作業が、そこでは中心となるだろう。自らがどのような方略をとったためにその解釈にたどりついたのか、ということを確認していく必要があるだろう。

解釈という営みは、文章に内在的な意味を理解するに留まらず投営みである。そこには、解釈者側の保有するものが少なからず投影される。スン(Sun)の言うように、解釈とは、読者によるテキストの \wedge 黙示的主题 \vee の \wedge 構成 \vee 過程⁴であり、テキストの表現を手がかりとして、解釈者各々が、そこから推測しうる \wedge 黙示的主题 \vee を \wedge 構成 \vee していくことなのである。たとえテキスト内に \wedge 主題 \vee が明示されていたとしても、読者の作り上げる \wedge 解釈 \vee はテキストに明示されている \wedge 主題 \vee の繰り返しとは

ならない。解釈の中には必ず解釈者の側の〈主題〉が含まれ込まれる。このことが強く現れるのが「方略Ⅰ」に他ならない。文学の授業において解釈を問題にする場合、解釈を提出した者の〈主題Ⅴ〉がどのようなものかということ把握していく必要がある。解釈の分析は、単に報告されたプロトコルの分析のみに留まるわけではなく、解釈者その人の分析にまで進む可能性を絶えず持っている。そういう意味で、李徴をどのように見ているかということの分析は、解釈を行った時点で解釈者自身のものの見方の分析につながっていく。この点で、文学の授業において〈主題〉を問題にする場合に、学習者が種々の解釈方略を用いてその〈主題Ⅴ〉に辿り着く過程そのものを掘り下げていく必要がある。

三・二 研究者の解釈と学習者の解釈との差異

— 解釈に多様性を与える条件 —

木村一信は、「山月記」の解釈の多様性について次のように述べている。

「山月記」は、さまざまな主題解釈を可能にする要素を持っている。友人や中島タカ未¹¹人の回想にあるように、中島の「生の声」を聞きとり、李徴のイメージに中島の現実の姿を重ねあわせて理解する見方もある。また、李徴が詩人を希う人物であったことに中心をおき、芸術家一般の運命におし広げるべく、「詩人たらんとするものの悲涼な運命が象徴されている」ことを読みとる理解の仕方もある。更に、人間存在の不確かさにつ

いて李徴が洩らす言葉に注意をむけ、「外界の悪意」とも呼ぶべきものの人間に及ぼす悲劇であると考えざるむきもある¹²。

ここに述べられたことをまとめて考えると、「山月記」の主題解釈はその解釈者がどのように自分なりの主題を解釈の上に投影しているかによって、多様な広がりを見せるということになりはしないだろうか。友人や中島タカ未¹¹人Ⅴのような解釈は、学生たちにはおそらく為し得ないものである。また、ここで木村が取り上げている、「山月記」に「芸術家一般の運命Ⅴをみる解釈」や、「外界の悪意」と呼ぶべきものの人間に及ぼす悲劇Ⅴをみる解釈¹⁰などは、それぞれの解釈者のモチーフを投影したものであり、解釈者のレトリカルな物言いによって説得力を持ち得たものと思われる。木村自身は、李徴の独白のことばの持つ「自己否定Ⅴ¹¹」に着目して、「詩業にとりつかれたばかりに自らの存在を危うくし果ては「滅び」の恐怖にとらわれてしまった主人公が、詩に対する限らない執着を抱きながら、そのような地点に辿りついた自分を批判し、否定を試みる物語Ⅴ¹²」として「山月記」を解釈している。

このような「山月記」研究者の解釈方略と学生たちの解釈方略との違いは、解釈の中に直接に自己を反映させている度合による。少なくとも研究者の解釈は自己のモチーフなり主題なりをもとにしたが、「山月記」そのものを対象化し、その文言の中に、間接的に自己の主題を滑り込ませていると言つてよい。これに対して学生たちの解釈は、むしろ自己の主題や自らの印象を土台として「山月記」の世界に对峙しようとしている。彼(彼女)らに

とっては「山月記」もまた自己を語る一つの素材に過ぎないのではいかと思えるほどである。しかし、そこには「山月記」受容のもっとも素朴でかつ基本的な姿勢が明らかにされているのである。「山月記」が多くの読者に強く訴えかける力を有しているのも、素朴な受容のレベルで読者たちの自己の主題をひきつけつけるからに他ならない。

三・三 解釈者の立場を左右する語りの構造

「山月記」を読む読者は、外山滋比古のことばを借りるなら、作中の人物である李徴の独白を八立ち聞き^注しているわけである。李徴の独白のことばそのものは、彼の聴き手である袁修に向けられている。読者が袁修の位置に入り込みつつ李徴の独白を聞くという構図がこのテキストにはある。しかし、李徴の独白を聴く読者は、袁修の位置に滑り込むと同時に、直接その独白を聴く者の位置に立つこともできる。

もちろん、袁修が作中で、八嶺南に使い、途に商於の地に宿^注ることがなかったとしたら、私たち読者も李徴の独白を耳にすることはできなかつたはずである。が、袁修に向けて発せられた李徴の独白の声は、私たちにとって、直接発せられたようにも思えてくる。李徴の独白の件りを読んでいる時、私たちはそれが袁修に向けられたことばであるということをも、多くの場合忘れてしまっている。袁修のことが、読んでいる間の私たちの意識の周縁に退いてしまうのである。袁修の立場に立つて、というよりは、李

徴の独自の一人の聴き手として読者は、李徴のことばに對峙せざるをえない。学生たちの解釈の中に、李徴に對して評価を下すという方略（「方略2」）を用いた者が少なくなかったのは、少なくとも李徴の独白の部分についてそれを自らに向けられたことばと受け取ったためではないだろうか。

独白の部分が全てそうだというわけではない。李徴が目の前にいる袁修のことを意識すればその分だけ、読者も作中の聴き手である袁修の存在を意識することになるのである。李徴が自らの運命について語る時、それは読者の自己にもっとも深く食い入ったものとなる。その時、読者は自己そのものを振り返らざるをえなくなるのである。

李徴のことばは単に自身の内面を吐露したもののばかりではない。袁修に對して懇請を行なう部分（第八、一六、一九文節）などは、聴き手としての袁修を意識したものであると言ってよい。自身の変身の原因を李徴なりに考察している部分は独白の色を濃くしている。そのような部分は、袁修に對して向けられているだけではない。読者もまた、李徴のことばを自らに向けられたものとして受け止めうる部分なのであり、読者の自己が強く感応するのは、むしろこういった部分なのである。李徴が変身の原因として取り上げていることが、読者のその時点での「自己同一」の主題^注に触れ、その結果として、李徴の心情に自らの心情を重ねようとする解釈が成り立ったとみてよい。

三・四 解釈に統一を与えざる条件

— 解釈者の自己を照らし出す装置としての「山月記」 —

解釈に統一を与えているのは、自己 (self) のアイデンティティに他ならない。解釈を行なうということは、テキストを媒介としながら自らの△自己同一の主題▽を表に出していくことなのである。「山月記」を解釈するということがこのテキストに自分なりの統一を見出していく営みである、ということを生徒たちの解釈事例は明るみに出している。たとえば、テキストの語法や構造に目を向けた解釈であったにしても、このテキストを自らのものとしていこうとすれば、そこに自分なりのテーマを投影せざるをえない。「山月記」の読者は虎になった李徴の△人間▽としての心に思いを致さざるをえないのである。

たしかに、「山月記」一編は、人間の心を訪れる「狂」への誘惑を描いたものと言える。読者の目の前で、一人の人間の心が失われていく恐ろしいドラマがそこに語られていると言っても過言ではない。選択の余地なく、一頭の虎とならざるをえなかった人間のドラマが独自の形で物語られているところに、この物語のリアリティの源がある。もしかしたら虎にならなくても済んだかもしれない、というような香気な仮定はここでは通用しない。

だからこそ、「山月記」に向き合う読者たちは、居ずまいを正して李徴のことを理解しようとするか、李徴のことを徹底的に批判しようとして身構えてしまうかのいずれかなのである。そのいずれの場合であっても「山月記」を解釈しようとする営みは、読

者の自己を浮び上がらせてしまうことになる。表現分析が、これほど読者の自己の問題と結びつくテキストはそれほど多くはないのではあるまいか。効果的な教授法を云々する前に、「山月記」そのものが、すでに読者を揺り動かすだけの機能を果たしているのである。「山月記」とは読者の自己を照らし出す装置である、と言っても過言ではない。自己のテーマをどのような形で解釈の中に投影し、そこから自分なりの作品を生み出していけるかということが、ことに「山月記」については重要なことになるということも、生徒たちの解釈群は語ってくれた。時代時代において、読者の自己を絶えず揺り動かし、自己の主題を照らし出していくところにこのテキストの教材としての価値があるわけであり、そこにこそ解釈を生み出すテキストとしての生産性がある。(鳴門教育大学)

[注]

1. Fowler, Roger (ed), *Modern Critical Terms*, RKP, Revised ed., 1987, p. 246.
2. Purves, Alan C., "Putting Readers in Their Places: Some Alternatives to Cloning Stanley Fish", *College English*, 42, 1980, pp. 228-36.
3. 有馬道子、「解釈の類型・心の類型」、日本記号学会編『テキストの記号論：ことばと私たちのポエティクス：記号学研究8』、東海大学出版会、二一四頁。
4. Holland, Norman N., "UNITY IDENTITY TEXT SELF," in

Tompkins, J. P. (ed) *Reader-Response Criticism*, Johns Hopkins University Press, 1980, p. 123.

5. 前田愛、「文学テクスト入門」、筑摩書房 一九八八年、一四頁。
6. 鷺只雄、「解説—梶井基次郎・中島敦研究小史—」、*日本文学研究資料叢書* 梶井基次郎・中島敦、有精堂、一九七八年、二九七〜三〇五頁。
あるいは、
村上呂里、「山月記」(中島敦)、「作品別文学教育実践史事典第二卷中・高校編」、明治図書、一九八八年、一九〇〜一九六頁。
7. T・K・スン(輪島士郎・山口和彦訳)、「文学のプラグマティクス」、勁草書房、一九八九年、二二三頁他参照。
8. 木村一信、「山月記」論、「日本文学」、二四卷四号、一九七五年、四九頁。
9. 平野謙、「解説」、「現代日本文学全集」第七九卷、筑摩書房、一九五六年。
10. 福永武彦、「中島敦その世界の見取り図」、「近代文学鑑賞講座」第一八卷、角川書店、一九五九年。
11. 前掲木村論文、五〇頁。
同右。
13. 外山滋比古、「近代読者論」、みすず書房 一九六九年、三六頁。

【付記】

1. 広島大学教育学部・同大学院教育学研究科を通じて、テクストを読み・解釈することの厳しさと愉しみを私に教えてくださった浮橋康彦先生のご還暦を謹んでお祝い申し上げ、感謝の意をこめて本稿を捧げます。
2. 本研究の基礎となった学生たちの解釈事例を得るにあたっては小森茂先生(当時鳴門教育大学助教、現在文部省小学校課教科調査官)に大変お世話になりました。記して御礼申し上げます。